

# 特殊報

令和5年7月11日  
奈良県病害虫防除所長

令和5年度病害虫発生予察特殊報 第1号

1. 病害虫名 ビワキジラミ *Cacopsylla biwa* Inoue

2. 発生作物 ビワ

3. 特殊報の内容 本県における初発生を確認

4. 発生地域 奈良県南和地域

## 5. 発生確認の経緯

- 令和5年6月に奈良県南和地域のビワ園地で果実および葉にすす症状（写真1）が発生し、キジラミ類と思われる成虫および幼虫の寄生が確認されました（写真2～4）。
- 成虫を採集し、農林水産省神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、本県で未発生  
のビワキジラミと同定されました。

## 6. 生態と被害

- 本種は、国内では平成24年に徳島県での発生が初めて報告され、その後、香川県、兵庫県、和歌山県、岡山県、愛媛県、大阪府、京都府および高知県から発生予察特殊報が発表されています。
- 本種はカメムシ目の昆虫で、寄生できるのはビワのみです。成虫の体長は2.5～3.5 mm程度で、2対の翅があり、小さなセミのように見えます。体は黄褐色～暗褐色で、白色の線状やまだら状の多数の斑紋があります。前翅は透明で、その外縁に沿って黄褐色の不明瞭な小斑紋が4～5つ並んでいます（写真2）。幼虫の全長は2 mm程度で、扁平な楕円形です（写真3）。自由に歩くことはできますが、動きは緩やかです。
- 本種はビワ樹上で年間に5回程度世代を繰り返すとみられます。春先に花や幼果、新芽で増殖し、果実が肥大する5～6月ごろに多発生します。その後、徐々に密度が低下し、7月中旬～8月の盛夏には樹冠内部の日陰に隠れて休眠状態に入り、枝先の葉上にはほとんど見られなくなります。9月以降、花蕾形成が始まると再び活動を始め、枝先に集まって交尾し、花蕾に産卵します。産卵された世代は11月ごろに羽化し、初夏に次いで発生密度が高くなります。冬期も低密度で花房や幼果に寄生し、春に再び増殖します。
- 本種は、幼虫・成虫ともにビワの樹液を吸汁します。特に幼虫は、吸汁した樹液を濃縮して、甘露と呼ばれる排泄物を排出します。甘露には糖が多く含まれるため、これが付着した葉や果実は糸状菌（カビ）が発生して「すす病」となり、黒く汚損されます。

- (5) ビワでは春に袋かけが行われますが、本種はその時点ですでに花房や幼果の隙間に寄生しているため、袋かけだけで被害を防ぐことはできません(写真5)。

## 7. 防除対策

- (1) 樹を観察し、3月以降の果実のすす病及び5～6月の葉裏の成虫(写真4)を目印に本種の早期発見に努めます。成虫は黄色に誘引されるため、侵入が警戒される地域では黄色粘着トラップによるモニタリングが有効です。
- (2) 薬剤防除は、11月以降の摘蕾後と3月の袋かけ前に実施します。また、収穫時に果実被害が確認された園では、収穫後から7月中旬ごろにも薬剤防除を実施します。
- (3) 幼虫は花房の奥深くや狭い隙間に潜んでいるため、薬液が十分にかかるよう、摘蕾・摘果後の花房・果房に十分な隙間ができた状態で樹全体に丁寧に散布します。また、葉の表面を覆う微毛が薬液をはじくため、薬液には展着剤(まくぴか、アプローチBI、スカッシュなど)を加用します。
- (4) 苗木を購入した場合には、定植前に防除を実施し、園内への持ち込みを防止します。



写真1 多発生樹でのすす病



写真2 ビワキジラミ成虫



写真3 ビワキジラミ幼虫



写真4 葉裏に寄生するビワキジラミ成虫



写真5 袋かけした果実の被害

表 ビワキジラミに適用のある主な防除薬剤

IRACコード	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数
1A	オリオン水和剤40	1000倍	収穫7日前まで	5回以内
4A	スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内
4A	オールスタースプレー	原液	収穫前日まで	2回以内
4A	モスピラン顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	3回以内
21A	サンマイト水和剤	3000倍	収穫3日前まで	2回以内
23	モベントフロアブル	2000倍	収穫21日前まで	2回以内

登録内容は令和5年7月5日時点のものです。農薬使用前にはラベルをよく読んで、記載された使用条件を遵守してください。

参考文献：ビワキジラミ防除のための総合技術マニュアル、農研機構

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/nara/>